

## 札幌市立もいわ幼稚園 審査委員特別賞実践提案研究会 開催レポート

2019年8月30日（金）、2018年度ソニー幼児教育支援プログラム「優秀園/審査委員特別賞」の札幌市立もいわ幼稚園による、「審査委員特別賞実践提案研究会」を開催しました。札幌市を中心に南は沖縄の石垣市、北は道内の北見市など、幼稚園、保育所、認定こども園、小学校、大学などからの保育・教育関係者約180名の参加がありました。

以下にもいわ幼稚園による開催レポートを掲載します。

### 研究会概要

1. 日時：2019年8月30日（金）9:00～16:20
2. 会場：札幌市立もいわ幼稚園（公開保育）  
札幌市立藻岩南小学校（全体会）
3. 主題：「科学する心を育てる」  
～「なぜ?」「どうする?」「こうしよう!」わくわくが広がる豊かな遊び～
4. プログラム
  - 1) 公開保育 9:30～11:00
  - 2) 開会式 11:20～11:30
  - 3) 実践発表 11:30～12:15
  - 4) 協議会 13:15～14:30
  - 5) 休憩
  - 6) 記念講演 14:45～16:15 演題「科学する心を育む保育」  
大豆生田 啓友氏/玉川大学 教授
  - 7) 閉会式 16:10～16:20

### 公開保育

#### <3歳ひよこ組>

スポンジで石けんを泡立てる泡遊びに、前日の絵の具遊びで使った絵の具を混ぜて、色が変わることを喜び、さらに別の色を混ぜて色が変わることに驚いていた。砂場では、塩ビ管を組み合わせて、水や砂、遊具を繰り返し流したり、塩ビ管の組み方を変えようと試したりした。思うように水が流れず困っていると、4歳児や5歳児も一緒に考えてくれ、うまく流れた喜びを感じることができた。塩ビ管に砂や水を入れて一気に持ち上げる様子を「爆発」と見立てて遊ぶことを喜んでいたので、保育者は、中が見えるようにペットボトルを切って筒状にした物や、一人でも扱いやすい細くて短い塩ビ管なども用意した。すると、いろいろと組み合わせて、水や砂の流れる様子を見て楽しんだり、砂に押し込んで水を溜めたり、横から漏れ出てくることを喜んだりするなど、今までと違うところに面白さを感じる姿があった。



#### <4歳うさぎ組>

戸外遊びでは、手洗い用の石けんを削り、水と共にボールに入れて泡だて器で泡立てる遊びを継続しており、3日ほど前から絞り機に泡を入れて、クリームを絞ってケーキを作る遊びが始まった。同じ子ども



たちが、根気強く泡作りに取り組み、泡が固くなったところで、スポンジに泡を絞ってケーキを作って売りに行く子どもがいた。泡が柔らかくて絞り器に入れても下から漏れてしまう様子を見て、ケーキではなく透明カップに入れて“カフェラテ風”のフワフワの飲み物を考えて作った子どももいた。

園庭にあるクワやウメなどの落ちた実を、春からご馳走作りに使っている。

当日は、落ちたリンゴを使い、自分たちでまな板など必要な道具を用意し、保育者に出してもらったナイフで細かく切って“リンゴスープ”など時間をかけて、じっくり作った。

数人の子どもたちでサッカーゴールやビール箱などを使って、家を作り、家の中では、泥の固まりを肉や野菜に見立てて網の上で焼いて食べるなどの遊びを、友達と一緒に楽しんだ。

「警泥やる人集まって！」と、友達を集めて、思いっきり走り、鬼ごっこを楽しむ子どももいた。

また、継続している虫捕りでは、モンシロチョウやダンゴムシなど、自分たちで見つけて捕まえることを楽しんだ。降園時には、虫かごに入れたチョウチョが弱っているのを見て、気づき逃がす姿があった。そして、自分たちでは見つけられなかったが、片付け時に、園庭の池でオニヤンマが羽化していることを聞き、学級のみんなで見ることができた。2日前にトンボの絵本を読み、“日本で一番大きいトンボはオニヤンマ！”と知っていたので、興味深く見入っている子どももいた。幼稚園の池でオニヤンマのヤゴが育っていたことに驚きと嬉しい気持ちでいっぱいになった瞬間であった。



### <5歳きりん組>

室内では光や色のきれいさに関心をもったことから、プリンターのインクで作った透明度のある色水を使って遊んだ。「ピンクと水色を混ぜたら紫になる」「全部混ぜたら透明になる」など色の変化や不思議さを感じながら混ぜる姿があった。遊びの後半では色水を光に当てると影に色が付くことに関心が高まり、太陽光に当ててみたり、暗い場所でライトに当ててみたりなど試行錯誤する姿があった。「白い紙を引いたら影が見えやすい」などこれまでの経験から試したり、「並べたらどうなるのかな?」「もっと暗い場所で(光を)当てたらどうなるのかな?」とやってみたいことを友達と伝え合ったりする姿も見られた。

ホールでは”ピタゴラスイッチ”に見立てて、ビー玉転がしゲームを作った。うまくビー玉が転がらなかった時は、「どうしてだろう?」「もっと斜めにしたらいいのかな?」など友達と相談して試行錯誤する姿が見られた。また、影絵クイズショーでは、これまでの取り組みで「どうやったらお客さんから影が見えるか」「どんな内容にするか」など友達と内容や方法を考えてきた。当日は他の遊びをしている友達や参観者にお客さんになってもらい、楽しんでもらうことで「大成功!」「みんなで考えたからできた!」など達成感や充実感を感じることができた。

また、片付け後は学級内で遊びの中で楽しかったことや発見したことを発表し合う時間を作った。言葉だけではなく、具体物も使いながら発表することで、友達の遊びや発見したことに、より興味をもつきっかけとなった。



## 実践発表

昨年度の論文の内容に沿って事例を紹介した。まずは、「地域の建設会社にお問い合わせをして園庭の雪山を作ってもらい、そこから雪山での遊びが広がり、雪山が解ける春先まで遊び込んだ事例」、次に、「自分たちが見付けた虫を“ナゾ虫”と命名して、家庭や他学年の子どもも巻き込んで遊びが広がり、体験を深めていった事例」について発表した。その後、今年度の取り組みについて各学年より発表する。3歳児は、「砂場で塩ビ管やペットボトルを活用して水を流すなどして様々な変化に気づく姿」4歳児は、「絵の具を使った色水遊びの中で色の濃さや混ぜることによる変化などに気づき教え合う姿」など、5歳児は、「自分たちが主体となって進める園のお祭りで、考えを出し合ったり、試行錯誤したりする姿や、その経験から新たに自分たちで発想を広げて遊びを作り上げていく様子」などを主題に絡めて紹介した。併せて本日の保育の自評についてお話しした。



### <質疑応答>

#### ○幼児期にはいろいろな物を育てていく時期。その中で科学する心という子どもの力を育てたいと思ったきっかけについて

～幼児期は、遊びの中でいろいろな力を育てていく時期であり、個々の子どもの興味関心に寄り添って、その子どもの楽しんでいること、発見や気づきなどに共感していきながら、その楽しさが他の子どもにも伝わり合って互いの経験が広がっていく、というような保育を目指している。そのように遊びを探求していく姿が、まさに「科学する心」とつながる姿であり、特に、「科学する心を育てる」ためにこれをする”ということではなく、遊びの中で個々の興味・関心に寄り添うことを大事に考えている。昨年度受賞させていただいたことをきっかけに、今年度は普段の保育を大切にしつつ～「なぜ?」「どうする?」「こうしよう!」わくわくが広がる豊かな遊び～という主題を設けて保育をしている。

#### ○5歳児の遊びの振り返りの時間に、園児が真剣に聞いていた。学びの共有の場で大切にしていることはあるか?

～友達の考えや気づきに注目してほしいと考えている。そのために、具体物を使って見せたり、子どもの言葉で伝え合ったりすることを大切にしている。

#### ○昨年自信のなかった子どもが成長している、という説明があったが、今年度の研究のテーマ、各学年のねらいなどの定め方について

～園の子どもの実態について成果や課題を年度初めに話し合い、そこから今年度の研究のテーマ、方向性などを決めている。各学年のねらいについては、年度初めに学級経営案を各学年で立て、長期の指導計画、短期の指導計画（週案）などで話し合い、子どもの成長や課題を確認しながら保育に当たっている。

## 協議会

#### ○協議の視点

1. なぜ?」「どうする?」「こうしよう!」と子どもが心を動かし探求している姿はありましたか?
2. そのための保育者の援助や環境構成について

#### ○協議方法

- ・ 6～7人の12グループに分かれて、視点に沿って保育を見て記入し



た付箋を台紙に貼りながら話し合いを行う。最後に、2つのグループから話し合った内容を発表いただき共有した。



#### ○主な協議内容（抜粋）

- 5歳児の遊びの後に集まった時に、遊びの写真を選んで子どもから聞き取りをして学びを振り返るということをしていた。遊びの中でいろいろなことをしているが、保育者がある程度方向づけをして、学びが深まるように振り返りをしているところが素晴らしい。例えば5歳児だったら、iPadやプリンターを置いておき、子どもと一緒に印刷をしたものに聞き取りをしてどんな経験をしているかを振り返ったり、それを保護者にも発信していったりすることも非常に有効ではないかという話も出た。
- 砂場や泥場などの環境構成がよく考えられている。砂場には、砂の可塑性にふさわしい遊具があつて、泥場には剣先スコップがあるなど、その物に応じたものがちゃんとあるということが分かった。もしかしたら、粘土層を入れたらもっと面白くなるかもしれないという話も出た。
- 子どもの学びを保護者に伝える時に、この幼稚園はただ遊んでいるだけではなく、こういうことを学んでいるのだということ伝えることがとても大事である。その時に、掲示物を活用し保護者に説明しているということがとても良い。このような形で子どもの気づきを保育者も保護者も一緒に楽しんでいくことで、教育の評価はもっと上がっていくのではないか。
- 自分たちが遊びの中で使いたいものが側に置いてある。例えばクルミ人形作りでは、段ボールカッターや、ティッシュ箱、ハサミなどが自然に置いてあるという環境が更に遊びを広げている。
- リンゴをナイフで切っている子どもがいたが、普段の経験からこの子どもは、上手に使えるという保育者の見取りから使用しているということだった。ナイフ等も使える環境、保育者との信頼関係を深めているから使えるという、子どものイメージを拾って受け止められる保育者のさりげない援助が子どもの「やりたい！」を広げる援助だった。
- 子どもの中から何度も「こうしよう」「あーしよう」という声が聞こえ、作っている場面でも、これで終わり、ではなくて「次こうしたい」という言葉が出てきた。皆が共通認識、目標をもってしっかりイメージを作り上げていく姿があつた。皆が一緒になって作っていける協同性、協調性が育っていると思った。
- 花びらを使ったケーキ屋さんでは、花びらなどを使える環境がすてきだと思った。置いておいた作りかけの物を壊さないでそこに置いてある姿には、チームの中で「大事にしなきゃいけない」というお互いの思いやりの気持ちが見られとても良いことだと感じた。

#### ○協議のまとめ（金澤指導主事より）

「何だろう」「この後どうしようかな」など、子どもたちが気づき、思考する姿がたくさん見られ、それに対して、一緒に楽しみながら、子どもの姿を見取り、思いを引き出し、実現できるよう関わる保育者の援助が見られた。

グループの話し合いで話題になった一人一人の子どもに寄り添った保育者の援助

は、「子どもの気持ちを引き出すような言葉かけ」や「子どもと一緒に考えながら遊びを進めるような関わり」など、保育者が主導で教え込むのではなく、子どもの気持ちや思いを尊重しているものであった。自分で気づき、考え、試し、取り組んで実現する経験を積み重ねていくと、小学校や中学校、そして大人になってからも、自分の力で考えて生み出したり、自分から人や物事に関わっていきこうとしたりする原動力につながっていく。

「科学する心」は、子どもにとっては最強の武器となる。探求することの面白さを知っている子どもは、困難にぶつかった時にも、諦めずに自分で考え、次の道を拓いていく強さをもてる子どもに育つだろう。私たち大人も、子どもたちとの保育をワクワクしながら考えていきたい。



記念講演

大豆生田 啓友氏/玉川大学 教育学部教授

まず本園の特徴として、子ども一人一人の特性や個性を温かく肯定的に受け止めていることが保育の基盤になっていることを挙げられました。また、「物の特性や仕組み、試行錯誤を楽しめる遊びの環境」「遊びの共有が子ども同士の一体感を生み、体験の深まりに繋がる仕掛けとなっている」「保育の発信をして保護者を保育に巻き込む工夫がされている」など、子ども一人一人に寄り添った保育者の援助や環境の工夫について具体的に解説されました。次に、「子どもたちが遊びに夢中になる、遊び込むことを大切にしたい保育では、非認知能力が育つ」「非認知能力の育ちは認知能力の育ちに繋がる」とともに、「乳幼児期に大人に受容的・応答的に関わられたことが、将来に亘り影響すること」について、具体例を通してお話されました。またこれらは、裏付ける研究（ペリープリスクール調査など）によって明らかにされていることも加えられ、だからこそ、今「保育の質が問われている」と力説されました。さらに、「子どもたちの遊びにブームが生まれる保育」の具体事例を通して、「子どもの見ている世界に応じて環境を再構成すること（絵本を含めて）が豊かな学びに繋がる」「ドキュメンテーションなど、保育の可視化の重要性」「子どもたちの興味・探究に、保護者や地域を巻き込む工夫」などについて、「科学する心を育てる保育」に結び付けて述べられました。



以下に、「他園の保育に学ぶ保育者研修」参加者による研修報告書からの抜粋を記載いたします。

- 科学する心を主体的な活動の中で育てるということについて、支援する側として難しさを感じる時がある。何故なら、支援のしかたには正解が無いため、これで良かったのだろうか、違った関わり方があったのではなかろうかと迷いを感じてしまう。しかし、ご講演をお聞きし、子どもたちが問いと探求を繰り返す姿、また、関心、感動を実体験している姿が見られたら、それこそがすでに「科学する心」の育ちにつながっているのだということをはっきりと理解することができた。この姿を指針とし、そこからより豊かな体験ができるよう、環境構成を行っていこうと思った。
- ご自身の体験談を通して、分かりやすく楽しく、時には涙が出そうになるような素敵なお話だった。自然と関わりながら、試して遊ぶことの大切さや、友達と協力しながら目標に向かって遊びを創っていくこと、協調性や社会性を育てる保育の在り方、そして、失敗した時に立ち直る力を培うには、乳幼児期がいかに大切な時期であるかを学ぶことができた。その中でも、子ども同士の関わりや遊びを広げていくための保育環境、保育者の援助、さらには保護者の理解も子どもたちの豊かな経験に不可欠であると分かった。
- 特に、印象に残っているのは、ご自身の体験談のお話だった。「手のかかる子ども」と否定的に捉えるのではなく、その子どもの好きなこと、得意なことをさせてあげられる環境こそ、大きく育つきっかけになるのだと感じた。自分の保育や関わりを見直す、よいきっかけになった。これからは、子どもたちの大切な時期に関われる幸せと責任を胸に、日々の保育に励んでいきたい。
- 最も心に残ったのは、0.1.2歳のいつも同じことをしているように見える繰り返しの行動・動作に「科学する心」につながる姿があり、そこに、着目することの重要性。その「科学する心」の芽に寄り添い、成長とともに枝が四方に伸びるかのようになり、より感性が豊かになり、表現方法や活動の幅が広がり、大木になるよう援助することが「科学する心を育てる」ということなのではないかと考えた。

※他園に学ぶ保育者研修…

「科学する心」をテーマに取り組みされている幼稚園・保育所・認定こども園に所属する保育者の方々が、他園の保育から学び、主題の理解を深め、自園の保育の質の向上に繋げていく研修の機会を支援するため、ソニー教育財団が実施している助成制度。詳しくはソニー教育財団のホームページをご覧ください。

- 「科学する心」をより身近に感じることができた。今直ぐにでも自園で実践できるのではないかと思われるお話があり、とても分かりやすく参考になった。自己決定を促すこと、遊び込む経験や試行錯誤の経験が重要で、「非認知能力」の育ちにつながる。本日のもいわ幼稚園の実践とつながることがたくさんあった。
- 子どもが主体、主役の保育の環境作りの大切さを再確認できた。問いや探究が生まれる、その背後には、子どもの見ている世界に応じて環境を構成する保育者の存在がある。そして、子どもの探究に、地域や保護者を巻き込む様々な工夫や保育の可視化の重要性を学ぶことができた。
- ワクワクが最強の武器で、子どもだけでなく保育者もワクワク楽しくて仕方ない保育を展開できるように、そのためには、計画も子どもの姿ベースで作成する必要があることを学んだ。また、保育者も願いやねらいをもつことと、計画の大切さを改めて感じた。そのためには、子どもたちの学びや成長を見取る力が大切だと感じた。